

もっと知りたい

ふるさと

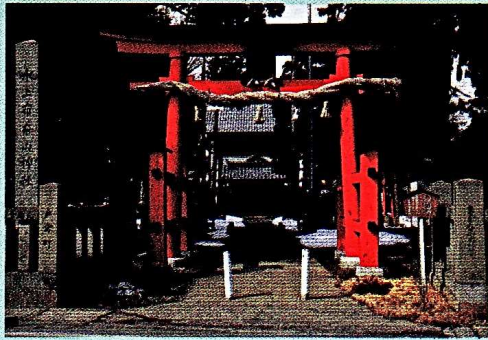
38

国の重要文化財 水上布奈山神社

慶長八年（一六〇三）北国街道が新設され、沿道には次第に宿場が設置された。下戸倉宿もこの頃に作られ、江戸時代には諸大名の参勤交代や善光寺詣りで賑い栄えた。

水上布奈山神社創建の時期は不明であるが、遠い昔、信濃国を開拓した建御名方神を諏訪大社に祀り、やがて全国に分社が五千余社出来た。下戸倉宿も現在地の高燥の良き地を選び、ささやかな社殿を建て祭神に建御名方神を勧請し、ここを鎮守と名づけ諏訪社としてあがめ祀った。

諏訪社名が水上布奈山神社



水上布奈山神社正面

になったのは天保六年（一八三五）四月三日京都の神祇官領下部家から社号を允可されたからである。

諏訪社は千曲川の洪水に度々流失したが、現在の神社は、天明五年（一七八五）当時の氏子一八八軒が名主を先頭に村役人、村人が総力を結集し、五年の歳月を費やして寛政元年（一七八九）四月に全面的に建て直されたものである。

この神社造営時の棟札には銘が記されているが大工棟梁名がなく、長い間、作者不明であったが諏訪宮大工の研究者故細川隼人先生をはじめ県文化財保護審議会委員故米山一政先生、同委員千葉大学工学部教授大河直躬先生等諸先生方の調査により、諏訪普門寺村大隅流大工棟梁柴宮長左衛門矩重の作であることが明瞭になった。

柴宮長左衛門は延享四年（一七七七）諏訪藩大工棟梁伊藤弥衛門の四男として生まれ、



奉造 諏訪宮殿一宇 屋宇安納神懸懸階 四ノ月廿日

初め村田家、ついで柴宮家の養子となった。長左衛門が大隅流を唱えたのは、養家の村田家が諏訪藩に仕える大工で大隅流であったからであると前述の細川隼人氏は述べられている。

天明五年（一七八五）四月、柴宮長左衛門が善光寺詣りの途中、下戸倉宿の鳥居屋重郎右衛門宅に一泊したところ、社殿造営の話があり、重郎右衛門の世話で長左衛門が造営工事を請け負うことになった。以後五年の歳月を費やして寛政元年（一七八九）四月に完成した。時に長左衛門四二歳で当社はその代表作である。

全面的に建て替えられた本殿は総樺材の白木造り、本殿間口五米奥行三米五十糶の間社流造で規模が大きく、県内の一間社流造の中では、二を争う大きさといわれ、正面の軒に唐破風をつけた装飾の多い造りである。



上り竜

この本殿を調査された千葉大学教授大河直躬先生は、『水上布奈山神社社誌』に「この本殿の特色として、先ず彫刻が優れていること、次に社殿にある彫刻の数が多いこと、しかもただ数が多いだけでなく蘇鉄に兎、竹林の七賢人、波に亀や飛龍、仙人像等々、彫刻の主題の豊富さは目を奪うばかりである」と書かれている。

長野県の生んだ名工では、長左衛門と同じ時期に諏訪から出た立川富棟やその子の富昌が有名であるが、立川流の合理的な建築に対し、経済的な収支を考慮しない昔気質の長左衛門の作品の方が个性的でダイナミックな躍動感に満ちている。

長左衛門の遺作である水上布奈山神社本殿は昭和六十三年（一九八八）に、国の重要文化財に指定された。

戸倉 柳澤穂積